

令和7年度 中学3年生実践

「129年後のメッセージ～文章の構成や表現の仕方について評価する～」

(教材名:『初恋』教育出版) 文責:石野裕子

1. この授業を構成するにあたって

本校生徒3年生にとって、中学校の授業で文語定型詩を読むのは本単元が初めてである。興味を惹かれやすい「初恋」がテーマの詩であるものの、なじみのない文語に抵抗感をもつことが予想される。そこで、文語定型詩の特徴について理解を深めながら、口語詩と同じように表現を味わい、時代を超えて評価されている『初恋』という作品の魅力を実感できる授業を展開したいと考えた。

本教材『初恋』は、林檎が象徴的に用いられていることや、作者の藤村自身によって改稿されていることが特徴として挙げられる。この二つの特徴に着目し、改稿前後の『初恋』を比較したり、レモンが象徴的に用いられた『レモン哀歌』と読み比べたりする課題を提示した。そして、藤村が『初恋』を発表してから129年後の今、『初恋』について評価する言語活動を設定した。

2. 単元計画（3時間扱い）

1	〈『初恋』にはどのような特徴があるか。〉 ・「ついに新しき詩歌の時は來たりぬ。 そはうつくしき曙のごとくなりき。」 の言葉とともに、『初恋』の作者や発 表された時代について知り、この詩が もつ文学的価値を理解する。 ・『初恋』を通して学習する内容を知 り、単元の見通しをもつ。 ・『初恋』を音読し、どのような特徴を もつ詩か捉え、交流する。
2	〈どちらの『初恋』が魅力的か。〉 ・改稿前後の『初恋』を、構成や表現の 観点から比較し、どちらの『初恋』が 魅力的か考え、交流する。

3 〈「林檎」と「レモン」の効果を味わおう。〉

・『初恋』と『レモン哀歌』を読み、象徴的に使われている果物が作品にもたらす効果について考え、交流する。

3. 授業の実際

(1) 第1時 『初恋』にはどのような特徴があるか。

導入では、好きな相手と自由に恋愛し結婚することが一般的でなかった時代から、西洋の文化の受容によって新しい恋愛観が生まれた時代へ移行する中で、島崎藤村が『初恋』を発表したことを紹介した。中学生にとって身近な「初恋」がテーマであることに加え、現代の自由な恋愛観に繋がる考え方方が公の場に表現された、「初恋」の詩の原点ともいえる作品だと知り、生徒は一層興味をもっている様子だった。

『初恋』の特徴を捉える際は、リズム・象徴・構成・比喩など、詩歌や文学的文章の教材を通して学んできたことを活かして理解する姿がみられた。(写真1)

以下は、生徒の振り返り（藤村に宛てて自分の評価を伝える形で記述する）の一部である。

○段々と「君」との距離が近づき、恋が進展していくことを表現しているんですね。七五調で連ごとの構成も似ているので、リズムよく読めて、こちらの気持ちまで弾んできました。比喩表現を使うことで、読み応えのあるものとなり、深く味わうことができる詩です。

○「初めし」という言葉を繰り返したり、林檎を薄紅の秋の実と表現して「薄紅」(=少女)ということを想像させたりして全体的に初々しさをだし、「初恋」を強調した良い詩だと思った。

他にも、「恋の盃」という比喩や、「林檎」「手」「髪」の色の対比が効果的に使われているため、奥行きがあるものとなっている。

○藤村さんの淡い恋心が、七・五の定型できれいに無駄なく要約されています。129年前に書かれたそうですが、内容に違和感がなくて、「恋」という文化は今も昔も変わらず残っていると感じられます。象徴的な「林檎」や「あげ初めし」と「人こひ初めし」など、言葉のこだわりが、いいですね。

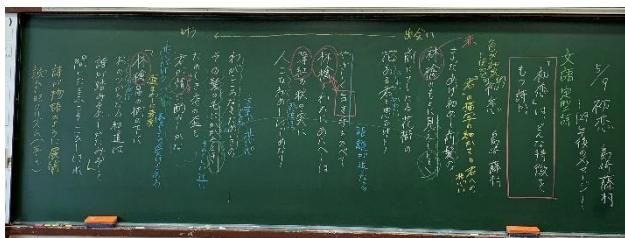


写真1 第1時の板書

(2) 第2時 どちらの『初恋』が魅力的？

第2時は、『初恋』の発表から40年後に作者本人が改稿した事実と、改稿後の作品を提示することから始めた。生徒は改稿した事実に興味をもち、「第3連が削除されたこと」「第4連の『こひしけれ』が『うれしけれ』に改められたこと」に気づいた。その後、生徒は2点の改稿によって詩にどのような変化が生まれたか考え、さらに自身のもつ「初恋」観と擦り合わせながら、改稿前と改稿後のどちらが魅力的だと考えるか語り合った。(写真2)

以下は、生徒の振り返りの一部である。

○よく改稿した!と言いたいです。第3連がなくなり、両想いかはっきりしないニュアンスになつたところが、林檎の甘酸っぱさ、あげ初めた前髪の初々しさとリンクしていて可愛いと思います。「うれしけれ」で舞い上がってしまう感じも、かわいいです。

○なんで変えてしまったんだ!第3連があることで両想いになったというのが明確に伝わるのに。あと、「恋」というものを知って大人の階段をのぼりはじめたという意味で、あえて大人っ

ぽい「お酒」で例えていると思ったので、「あげ初めし前髪」の大人っぽさと統一感をもたせるためにも、第3連はあったほうがいい。

○改稿前の方が魅力的だと思います。近い距離に彼女がいてキュンしてしまう感じや、少し大人ぶってお酒の表現を使うところが初恋らしいと思いました。また、友達や家族にも使える「うれしい」という言葉ではなく、「恋しい」といった、THE恋愛という言葉を使っていて、「恋しています!」という感じも、初恋らしいと思います

○第3連の大人っぽい表現がなくなり、関係性がはっきりしない改稿後の方が、初々しい恋という感じで好きです。でも、「こひしけれ」は、そのままが良いと思いました。自分だったら好きな人に話しかけたら「好きだな」が最初にくるからです。

○改稿前の方が好きです。「こひしけれ」という表現を率直に使うのも、「初恋」ならではの純粹さが表れていると感じたからです。初めての感情をなんと表せばよいか分からず、溢れた言葉が「こひしけれ」だったのだと思います。

○初恋は誰もが経験しているけれど、それが叶った人は少ないと思います。雑誌に載って大勢の人がこの詩を読むとなった時、初恋が実った二人の様子が描かれた改稿前は、共感を得にくいと考えます。初恋の初々しさ、甘酸っぱさ、自分の気持ちがあふれちゃう、この誰もが共感できる感じが改稿後からはよく伝わります。でも、個人的には好きな子の前で背伸びしたくなっちゃう気持ちや、大人に憧れる感じもよくわかるから、「恋の盃」という表現が好きです。

○改稿前の方が魅力的だと感じました。第3連で恋が実ったことを明確にした方が、「好き」という思いが伝わってくるし、「君」の優しさや思いも描かれていて、私の「初恋」観に合っていました。改稿後は、「今振り返ってみると、あの時はうれしかったなー」というふうになっていて、大人っぽさが感じられました。だから、私がもっと大人になったら、改稿後に共感できるようになると思います。(きっと)



写真2 第2時の板書

(3) 第3時 「林檎」と「レモン」の効果を味わおう。

第3時は、高村光太郎の『レモン哀歌』を提示し、『初恋』と『レモン哀歌』のそれぞれの詩を「象徴」という観点から鑑賞する学習を行った。生徒は、詩に表現された内容と象徴的に用いられている「林檎」「レモン」を結びつけ、表現の効果について考えたことを語り合った。(写真3)

以下は、生徒の振り返りの一部である。
(振り返りは、『初恋』で「林檎」を用いたことに対する評価を中心に記述した。)

○詩の全体を通して林檎を使ったことによって、甘酸っぱい可愛らしい初恋のイメージになりましたね。甘い香りと、しっとりした丸っこい質感が思い浮かぶし、この詩の甘い雰囲気にも繋がっていて良いと思います。林檎の小ささと丸さと可愛さと甘さを「君」に重ねていて、いいと思います。

○「林檎」は、他の果物と比べても同じイメージを抱いている人が多いので、「初恋」も、わかりやすい詩になっていると思いました。私は、林檎はフレッシュで、かわいらしくて、でも少し大人っぽいイメージがあります。それが、この詩の初々しい感じや背伸びしている感じと一致して、すぐに情景が浮かびます。言葉の力って、すごいですね!!

○詩にフルーツなど象徴的なものをいれると、詩に出てくる人の心情や情景を想像しやすくなる。その心情や情景の内容は、そのフルーツの味や色、季節、花言葉など、様々な特徴から想像される。例えば『初恋』の林檎だったら、甘酸っぱいもので初々しさを感じる。そう考える

と、『初恋』には「林檎」がぴったりだと思う。

○林檎は赤色で甘酸っぱく明るい印象のため、「初恋」にすごく合っているなと感じました。藤村さんが本当にそこまで考えていたのかは分からないです、芯がある林檎⇒まっすぐな思い、種が2つのイメージ⇒2人の仲が良い関係性、を表現しているとも考えました。象徴的に使う物によって印象が大きく変わるので、おもしろいと思う反面、使いこなす詩人さんはすごいなと改めて感じました。

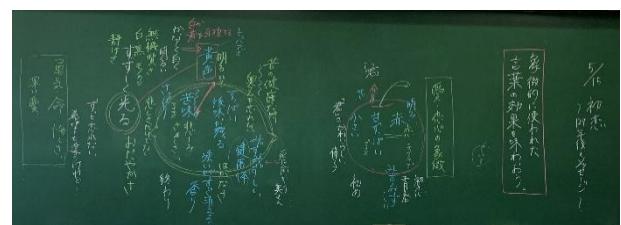


写真3 第3時の板書

4. 今後の学びについて

今回の『初恋』では、過去に文学的文章や短歌を通して学んだことを活用しながら、詩の中の言葉にこだわって追究する生徒の姿がみられた。今後は、「俳句」や「和歌」を題材として扱う单元が控えている。どちらも使用できる音数に制限がある文学だからこそ、そこに用いられる言葉や表現は一層研ぎ澄まされたものとなるはずだ。これまでと同様に、言葉による表現を味わう授業を展開したい。

5. 参考文献

文部科学省(2018).中学校学習指導要領解説
国語編 三省堂

『現代の国語』編集委員会(2021).現代の国語3 教材研究と学習指導